

青海小穴洞 探検調査に参加して

藤井 常和

才一次青海洞窟群探検計画が企画されたのは、40年の6月であつた。新潟県西頸城郡一帯は、秋吉層と呼ばれている有名な石灰石地帯であり、セメントの生産地として知られている。その西頸城郡青海町田海には、大小無数のドリーネが散在しているのである。その中で大穴・小穴と仮に呼ばれている2つの大規模なドリーネがある。大穴・小穴はかつて、誰一人として穴の奥深く入った者がいないと言うことである。6月の下旬に大穴・小穴と附近に散在するドリーネを下調べするために、偵察隊3名を現地に送つたのである。7月に入つて偵察隊の資料をもとに、才一次小穴探検調査の詳細な計画を練つたのである。まず、6月の下旬でさえも、ドリーネの中には相当の積雪があり、附近一帯も雪がかなり残っている状態である。それで私達は活動期間を8月16日～27日と予定したのである。

当時、私達は岐阜県郡上郡八幡町にある熊石洞を探検し、地底120mの深さまで征服し、日本才二の縦穴であることを確認した。洞窟探検に必要な装備であるワイヤーバシゴ60m、クレモナバシゴ18mを持ち、洞穴内で活動するに十分な技術を隊員全員が修得しているという自信を持っていた。おそらく日本に熊石洞に匹敵するような洞窟はまず存在しないだろうと考えていた。それ故、私達の自信が過剰になつてた。それが青海小穴洞窟探検調査にて反省を促すことになつた。7月の下旬に1週間のトレーニング合宿を終え、8月下旬の活動に万全の準備をもつて、先輩や後輩に激励されて、8月16日の夜大阪を出発したのであつた。翌朝青海駅着、バスと役場の車で福来口に行き、そこから各人荷物を背負い、目的地に向つて涸れ沢を登り始めた。カンカン照りつける太陽の下を、滝のように汗をかきながら登つて

いつた。偵察時には残っていた雪が消え、歩きやすくなつているだろうと、判断していたのが大きな間違いであつた。沢はブツシュでおおわれ、ルートを判断するのに困難な上、夜行列車の睡眠不足、カンカン照り、その上重い荷物である。急な沢を登り始めて3時間もたたぬうちバテ始めた。私達が登り始めた麓は、すぐ目下に見えるのである。途中2人がルート偵察に出て、大休止を取つたが、偵察に出た2人は、なかなか帰つて来ないのである。1時間半程して帰つて来たが、途中迄しか道が確認できず、今日中に目的地に着くのは困難であるとの判断であつた。この沢を1時間程登つた地点に水場があり、今日はそこにキャンプを張ることになつた。薄暗くなつた沢を、又、全員荷物を背負つて歩き始めた。もう太陽は山の向うに沈もうとしている。30分程歩いたがどうしても疲労には勝てず、遂に荷物を解体することになつた。今晚と翌朝の食料、野営具一式以外の荷物はそこに残し、水場をめざし真暗になつた沢を、ヘッドランプの明りをたよりに登つていつたのである。私は少し不安な気持ちにおそわれたのである。やつとのことで水場に着き、テントを設営し夕食を終えたのは9時頃であつた。もう私は心の落ち着きを取りもどしていた。

翌朝リーダーの松本さんと川上君、それに私の3人がルート偵察に出て、残りの者は昨日解体した残りの荷物を、キャンプ場まで運ぶことになつた。ルート偵察に出た私達は、深いブツシュをかきわけ、ナタで切り開きながら、やつとのことで、出発前に予定していたベースキャンプ設営地点に到着したのであつた。しかし、その予定地点には、身丈2m以上もあるブツシュが生い茂り、その上6月の偵察時には水がゴーゴー流れていた沢は、全く水がなく、ゴロゴロした石と砂地の川床を見せていたのである。暫らくの間私達は呆然とその場に立ちすくんでしまつた。急にのどがカラカラに渴くのを覚えたのである。朝、偵察に出る時水を用意して来なかつたのである。3人で協

議の結果、その沢をもう少し上流に行つて見ようと、水を求めてトボトボと歩き始めた。まるで西部劇に出てくる砂漠の中のシーンのように、あわれな姿であつた。沢にはアブの大群がブンブン群つて飛んでおり、汗でびつしよりの服や顔にまといつき、払えども、行けども後からついてくるのである。40分程歩き続けたか、ようやく水の流れている地点に辿りついたのであつた。その時程、水の貴重さが身にしみてわかつたのである。適当なベースキャンプ地を決めて、キャンプに帰つて来た時は昼はすでに過ぎていた。

午後から今日、ベースキャンプ地と決めた場所に、食料・装備の一部を運びキャンプに帰つてきたのは夕方であつた。

翌朝キャンプを撤収し、ベースキャンプ地に着いたのは昼近くであつた。出発前ベースキャンプ予定地点に、半日で行ける予定が2日半もの日数を費したのである。午後下調べに小穴に行つて見たが、ドリーネの中にはまだ雪が残つていた。そしてその底に大きな口を開けて、暗黒の世界が奥深く続いているのである。だが、入口から60m下に大きなホールがあり、そこに雪溪が残っているなんて——しかも万年雪の雪溪である——誰も予知することはできなかつただろう。(私が認識不足であつたかも知れないが。)

洞窟内の気温は雪の為に3度、水温4度と非常にきびしく、乾湿計は湿度100%を示している。〔通常、洞窟内での気温や水温は、夏・冬にかかわらず大体一定(水温・気温ともに12~14度)である。しかし大規模な洞窟(1km以上の洞窟)程変化の差が大きい。〕洞窟内はもやでかすみ、ヘッドランプの光も数m先には届かないのである。気温3度、水温4度、湿度100%という条件のもとでの活動は、体力の消耗が激しく、洞窟内で行動できる時間は個人差はあれ、7時間が限度でないかと思われる。私達が準備したワイヤーバシゴは、60m下の雪溪のある大ホールに降りる為に使つてしまつた。残りハシゴは18mである。洞窟は更に奥へと落ち込んでいる。

これまで経験したことのない大規模な洞窟であることは確信できる。再びハシゴを使用しなければならない。だが、ハシゴをジツヘルする適当なピンがない。洞壁の龜裂にハーケンを打ち込み、ハシゴをジツヘルする。5m程度の深さで垂直に落ち込んでいる。壁を伝つて地下水が流れている。更に奥に進む。すると、足もとの乳白色にやや褐色を帯びた石灰石が急に切れ、暗闇がヘッドランプの光に浮び上る。そこで再び垂直に落ち込んでいるのである。他にとるべきルートがない。その上、今迄壁を伝つて流れていた地下水は、そこに集つて滝となつて落ちているのである。下をのぞいて見るが、カーバイトランプの光りさえ下まで届かない。真黒で何も見えない。数回、石を落して見る。ガーンと音のはね返つて来るのに3~4秒かかる。60~80mの深さはあるだろう。十分であると考えていたハシゴの絶対数不足、それに予想以外の洞窟内でのきびしい気象条件である。我々の行手は完全にはばまれたのである。残念ながら今回は引き返さねばならない。この下をアタックするのは次回の調査活動にゆだねねばならない。——しかし、次の機会は早くも2ヶ月後にやつて来たのである。

関大・阪大・市大の混成パーティで才二次探検調査を行なうことになつたのである。今回は市大・阪大のワイヤーバシゴ各30m、それに関大のワイヤーバシゴ60m、クレモナバシゴ18mの計138mのハシゴである。前回の経験によつて綿密なアタック計画と、洞窟内でのきびしい条件に耐えられる装備と、工夫をこらしたのである。そして前回に引き返した地点からアタックに目的を置いたのである。幸いにも私が、その時アタック隊員に選ばれたのである。アタック地点から55m降りてみたがハシゴが足らず、15m程足下に底(才3回目には大ホールとわかり、更に奥深く続いている)を確認しただけに終つたのである。頭から雪解け水をかぶり55mのワイヤーバシゴを、往復40分程かかつて昇り降りするのは、相当な体力の消耗であ

る。インターホンで連絡をとりながら降りるのであるが、リーダーの「底は見えたか」と言う声に、「まだです」と答える声も緊張のせいか、少しばかり震えている。手はしびれて握力がほとんどない。全身に水をかぶっているが、身体は汗をかいている。緊張の連続であつた。上に登り着いた時には足がもつれる程であつた。一服のタバコは千金に価するものである。

今回もハシゴ数が足らず、オ一次・オ二次と装備係を担当した私にとつて苦い経験となつたのである。しかし概算ではあるが、このアタックで堅穴洞窟における、日本最深記録を樹立したのではないかと言われ、感慨無量であつた。しかし、その記録もすぐに更新されることは確かである。少し寂しい気もするが、多くの経験を得たのである。特に征服という美酒に酔つてはならないということである。

洞窟内の自然条件は大きく変動しているのである。最初に 60m 下の大ホールで雪溪を見て驚き、オ三次探検調査には、オ一次・オ二次の時には考えられなかつた地下水の流量である。我々が予知することができない事が、絶えず洞窟内で起つていたのである。

常に私は自分にきびしく反省を求め、自信というものが、うぬぼれに変わらないように日常から、洞窟活動をあらゆる面から研究し、きびしく見つめ、更に一歩進んだ探検活動を行ないたいと考えているのである。

完